

市橋文庫蔵『弥生日記』訳注（三）

愛知県立大学稀書の会

本学学術情報センター市橋文庫には、岡崎の俳人鶴田卓池と刈谷の俳人中島秋拳が編纂した『弥生日記』の刊本を蔵する。稀書の会では、地域の文化及び文化交流史の考究・紹介を目的として、本学が豊富に蔵する古俳書資料のうちから、この『弥生日記』を選び、その読解に取り組んでいる。月に一度の輪講により一昨年度から読み進め、今年度の紀要原稿は、輪講の成果の中から、冒頭の卓池・秋拳の五十韻のうち第四十二句から末尾までと、それに続く記述をとりあげている。

輪講での各句の検討は、稀書の会のメンバーが担当し、参加者による複数回の討議を経た後にあらためて紀要用に成稿している。輪読の際の発表者の名を担当箇所の末尾に記し、原稿の末尾には、稀書の会の会員の名を記した。

【凡例】

- 一、底本は文政七年五月名古屋久兵衛版『弥生日記』愛知県立大学学術情報センター市橋文庫蔵（OH・142）本である。
- 一、翻字本文は、文政七年版を忠実に翻刻した。本文掲出にあたっては、【翻刻】に本稿で扱う箇所を一括掲出し、【注釈】部分には、注釈の便を考慮して適宜分割・本文改訂をなした形でとりあげた。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点、送り仮名を補った。翻字本文を適宜参照されたい。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付し、前句を添えた。

一、訳注においては、【語釈】、【一句立】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】の項目も設けた。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、俳諧などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じて平仮名に改めた。

【翻刻】

盃かすか契りとなつた今の妻

拳

船は誰そと梶音でしる

池

は、からぬ嚏に睦を筑波根や

拳

萩いけて退く帷子の皷

池

出すまして夜をもうそかぬ秋月

拳

池かしらよりいなす鳩吹

池

産声を待間遅しとか、へ膝

拳

清けにいろをかける櫟

池

花さそふきさしか雲のた、すまひ

拳

雪も仏も別れ済日に

池

弥生朔日達堂朱芳流芝

破籠竹筒なと携来りて仮寐す

西に茶の木つゝきの坂あり坂をくたれば

清水なかれて山葵の窪といふ處

あり

手おさへの鼠を逃す茶摘かな

畔道や並ふ燕に飛ふつはめ

朱芳は小窓にもたれひとり

こちして

鶯や日なれて声の引はなし

流芝か懐にしても来たりし句は

柴舟のあとをよこきるきゝすかな

夜ハ夜とて嘶に来たり山さくら

敷芝にめはちやかなるかはつ哉

かへる雁風呂いるうちのゆたんより

達堂

流芝

朱芳

水角

和楽

東雅

棟老

「五ウ

「六オ

【注釈】

積はへてある薪の入れ札

二折裏五（四十二） 盥かすが契りとなつた今の妻

挙

【式目】 恋（契り・妻）

【作者】 秋挙

【語釈】 ●盥 水や湯を入れて、顔や手足を洗う際に使用する平たい容器。「盥：生子、穢多、湯殿、鉛売、頭そる、馬、星祭」（俳諧類船集）。●かす 残りかす。汚れ。「糟：馬の毛、漬物、油、煎菓、紅粉、漆、打疵、あまかへる、牛、灰汁、ふるふ」（俳諧類船集）。

【一句立】 盥のかすが縁となつて結婚した、今の妻。

【現代語訳】（前句 積み並べてある薪には入れ札がついている。）盥のかすが縁となつて結婚したのが今の妻なのだ。

【考察】「入れ札」は、意中の人への言い入れということから「結婚の申し込み」につながるのではないか（参考 鈴木勝忠『川柳雑排江戸庶民の世界』）。このことから、「入れ札」に「契り」が付くのであろう。「薪」から湯屋が想起され、「盥」につながると思われ、湯屋での恋が男女を結びつけるイメージの句ではないか。

「盥」は、和歌においては「恋」を想起させる際には「七夕」で詠まれることがあった。「きかばやなふたつのほしの物がたりたらひの水にうつらましかば」（建礼門院右京大夫集・277・右京大夫）。

（山本智穂）

盥かすが契りとなつた今の妻

二折裏六（四十二） 船は誰ぞと楫音でしる

池

【式目】 雑（船）

【作者】 卓池

【語釈】 ●船 「盥」から連想される「盥船」のイメージで「船」とつけた。また、「盥」の持つ「七夕」のイメージであっても、「船」「楫音」につながってくる。「足漕のとどろき渡る橋の月／たらい音頭に又くづれたり」（蕉門俳諧集二・

末若葉・43・柴霽)。**●楫音** 櫂や櫓などを使用して船をこぐ際に生じる音。『万葉集』の頃から和歌に詠み込まれている。「海人娘女棚なし小舟漕ぎ出らし旅の宿りに楫の音聞こゆ」(万葉集・雑・935・笠金村)。「由良のとや湊こきいづる梶の音もはるかにかすむ雁の一行」(宗祇集・春・16・宗祇)。「楫音も裸ときけば暑さ哉」(蕉門俳諧集一・国の花・1106・白雪)。

【二句立】あの船は誰でありましょうか、楫音で分かります。

【現代語訳】(前句 盥のかすが縁となつて結婚した、今の妻。)そして、夫が帰ってくるのを楫音で知る。

(山本)

船は誰ぞと楫音で知る

二折裏七(四十三) はばからぬ噓(うそ)に啞(うそ)を筑波根や

秋拳

【式目】冬(噓)

【作者】秋拳

【語釈】●はばからぬ 対象とするものに遠慮しないこと。●噓 この句においては、くしゃみやみそれ自体を指す。「色見えぬ花の匂ひにくさめして」(其便・146)。「くさめは恋の邪魔に成也」(国の花・雪・2866)。喜多村信節の随筆「嬉遊笑覽」方術「噓の頌」に、『枕草子』の例を挙げて「枕草子」…宮に初て参りたる頃といふ条、物など仰られて「我をば思ふや」と問わせ給ふ。御いらへに「いかにかは」とけいするにあはせて台盤所のかたに、はなをたかくひたれば「あな心う。そらごとするなりけり」云々。わが願ふこと、おもふことある時、人のはなひるだにそのことかなはずとする習とみゆ」とあることから、何か願うことや思うことがある折りに噓の音が聞こえると、それは叶わないと考えられていたと思われる。●啞をつく「晩鐘の啞つく日あり春の雨」(秋風記下・247・李暁)。「啞ついた様に春なき寒さ哉」(葎亭句集・168)。これらの句より、期待外れであるという意味にとる。●筑波根 「つくばね」とい

う同じ音を通して、常陸国の筑波・新治・真壁の三郡をまたがる筑波嶺と、ビヤクダン科落葉低木の植物である衝羽根との両方の意味を持つ語であるか。筑波嶺は、古く山上に男女が集い歌垣の遊樂が行われ、万葉集以来の歌枕として知られる。「つくばねのみねより落つるみなの川恋ぞつもりて淵となりける」（後撰集・恋三・776・陽成院）。「我ならぬ人に心をつくば山下にかよはむ道だにやなき」（新古今集・1014・能宣）、「筑波山つくづくものを思うかな君を見ざらんほどの心地を」（元輔集・154）のように、秀句などで恋の心を詠む表現も多い。この句においては、筑波根の語が入ることで恋の場面であると表現しているようである。またこの句では、「唼を付く」の「付く」と「筑波根」の「筑」がかけられて詠まれている。

【一句立て】遠慮の無い噓で期待はずれとなる、筑波根よ。

【現代語訳】（誰の帰りの船かその楫音から期待する。その静けさに）遠慮の無い噓が響き、（楫音からあなたが来ると期待したことは）期待外れであったと分かった。

（加藤華）

はばからぬ噓うそに唼うそを筑波根や

二折裏八（四十四）萩いけて退く帷子の皺

卓池

【式目】秋（萩）

【作者】卓池

【語釈】●萩いけて 萩を瓶などに挿し、生け花をしている様子か。「萩活けて置けり人のさはるまで」（不夜菴太祇苑句集・秋・359）。●退く いる場所から離れ去る。また、逃げ去る。「祈加持してのく狐つき」（宗因七百韻・三吟歌仙・447・元順）。「紅梅やのく鶯のあしのうら」（後の旅・436・吐竜）。●帷子 夏用の裏のないひとえの衣服の汎称。この「帷子の皺」は、「蠅ならぶ」歌仙の例句が示すように、薄い帷子を着古しくたくたになった初秋の頃を表す言葉であ

り、同時期の景物として萩がある。「蠅ならばはや初秋の日数かな／葛も裏ふくかたびらの皴／小灯を障らぬ萩にかけ捨て」（「蠅ならば」歌仙・発句／脇／第三・去来／芭蕉／路通）。「我きれば皴帷とはや成ぬ」（一茶発句・文化十一年甲戌・2629）。

【一句立て】初秋になって咲いた萩を活けて立ち去っていく、その帷子には、夏のうちからずっと着続けた皴がよっていることよ。

【現代語訳】（遠慮の無い噓が響き、あなたが来ると期待していたことは、期待外れであったと分かった。）それでは、萩の萩を活けて立ち去ろう。夏が終わり、くたびれた帷子に皴がよった頃でもあるので。

【考察】例句として出した「葛も裏ふくかたびらの皴／小灯を障らぬ萩にかけ捨て」に見られる秋の風情を意識して、芭蕉の句のように季節の変わり目を読み込んだものと考えられる。

このあたり、秋拳がくだけた句を詠み、卓池が端正な句に引き戻し、という掛け合いが続いているような印象がある。

（加藤華）

萩いけて退く帷子の皴

二折裏九（四十五）出すまして夜をもちそがぬ秋の月 拳

【式目】秋（月）

【作者】秋拳

【語釈】●出すまして 完全に姿をあらわして。また、出て澄み切っていて。「すます」は動詞の連用形に付いて、「済ます」の意味からその動作が完全に完了することをあらわしている。さらに「澄ます」の意味もあわせ読みとれば、空に出て、澄み切った光をはなつてという意味となろう。「しら露に日は出すましぬ八重葎」（青々処句集・秋・245・卓池）。

●夜をもちそがぬ 夜の間も（沈むのを）急がないで。「秋の夜のながき程をやたのむらんでいそがぬ山のはの月」

(玉葉集・秋下・639・平貞時)。「短夜も月はいそがぬ形をして／壁にたておく琵琶を転ばす」(篠の露(歌仙・元禄六年)・3／4・涼葉／左柳)。**●秋の月** 秋の月は、四季の中でもひとときわ愛でられる。「月トアラバ、∴秋の夜∴」(連珠合璧集)。「いそぎつつ我こそ来つれ山里にいつよりすめる秋の月ぞも」(後拾遺集・秋上・248・藤原家経)。「萩に移り松にてり行や秋の月」(俳諧新選・月・1516)。

【一句立】空に隠れなく姿をあらわして、夜の間も悠々と急がず照り輝いている、秋の美しい月よ。

【現代語訳】萩を活けてさがっていく人の着ている帷子には、夏の間中着たための皺がよっていることだ。そんな秋になつた今、空に隠れなく姿をあらわして、夜の間も悠々と急がず照り輝いている、美しい月よ。

(伊藤伸江)

出すまして夜をもしそがぬ秋の月

二折裏十(四十六) 池がしらよいなす鳩吹(はとふき)

池

【式目】秋(鳩吹) 「初秋 鳩吹」(毛吹草・初秋)

【作者】卓池

【語釈】●池がしら 漢語「池頭」を和語で表現したもの。池のほとり。●いなす 立ち去らせる。追い払う。「よい程におどしていなす鳴子哉」(律亭句集・鳴子・1304)。**●鳩吹** 両手をあわせて息を吹き、鳩の鳴き声のような音を出す

こと。このようにして鳩のような声をだすことを鳩吹というが、ここは名詞で鳩吹と読むのである。俳諧においても、名詞の「鳩吹」の例が見られる。「鴿吹の実もとおもふはなしかな」(蕉門名家句集(野坡)・864)。「ころりからりと鳩吹が行／月かげのうそうそ寒くなるままに」(古わらじ(半歌仙)・文化七年五月・3／4・蕉雨／一茶)。

【一句立】池のほとりで、鳩の鳴き声のような音を出して、人を立ち去らせる鳩吹がいることよ。

【現代語訳】空には、隠れなく姿をあらわして夜の間も悠々と輝いていて、急いで隠れてしまうこともない、秋の美し

い月があることよ。だが、池のほとりで、鳩の鳴き声のような音をだして、人を立ち去らせて猟をしようとしている鳩吹がおり、そんな空にも池の面にも映る美しい月を、池のそばで愛することもできないことだ。

【考察】歌語「鳩吹く」は古来、難義語として歌論書で解説されている。『袖中抄』には「はとふくとは、山鳩は秋のさかりに鳴けば、秋の山人は鳩のまねをして、手を合はせて鳩の声のように吹ならすなり。猟師の鹿待つにも人を呼ぶとても、又人に鹿ありと知らせむと思にも、手を合はせて吹くを鳩吹くとはいふなり。」とあり、『俳諧無言抄』は歌論書を引きつつ、「鳩吹く」先は猟師の鹿をねらふ処へしらずして、人のとをるをとめんとするために手を合せて口にあて、鳩のまねをする也。相図也。ますらおが鳩吹秋の音立て留れと人をいはぬばかりぞ」と述べる。『俳諧御傘』も同様に踏襲している。

こうした俳書の理解から考えて、付合では、芭蕉の著名な句「名月や池をめぐりて夜もすがら」（孤松）のような仲秋の名月への思いを念頭に置き、いつまでも美しく輝く名月が空に出、池に映っているのに、それをめめることなく、鳩の鳴き声を真似て狩りをする鳩吹を出し、場面転換の妙をねらったか。

（伊藤）

池がしらよりになす鳩吹（はとふく）

二折裏十一（四十七）産声を待つ間遅しとかかへ膝 拳

【式目】 雑

【作者】 秋岑

【語釈】 ●産声を 子供が生まれる瞬間の産声を。「寒梅に比す産声は男かな」（しら雄句集・隣家のよろこべるさはぎに・1079）。●待つ間遅しと 待っている間も遅いと感じる。「きのふみし霞の衣空にきへて待まぞおそき郭公かな」（邦房親王御詠・待郭公・492）。「待間は長く短夜の月／其価千金といふ春の花」（時勢粧・歌仙（寛文十一年五月上旬）・5543

／ 5544)。**●**かかへ膝 両腕で自分の膝をかかえるような格好で座っていること。膝をかかえている様子であろう。心配と期待とが交錯するのである。「ちからなや膝をかかへて冬こもり」(俳諧寂栗・哀傷・185)。「笠をきて膝をかかへて昼寝哉」(一茶集発句編(文政三年)・3950)。「菊のもと掃かすや椽にかゝえ膝」(一枚刷「つくろはぬ」(文化三年刊)・巴州(のちの板倉塞馬))。

【一句立】子供が生まれる、その瞬間の産声をするのを、遅い遅いと心配しながら、膝をかかえて待つていることよ。

【現代語訳】池のほとりで、鳩の鳴き声のような音をだしている鳩吹がいる。鳩吹ならぬ、鳩の声のような産声は聞かないかと、遅い遅いと感じて、膝をかかえて心配しながら待つていることだ。

【考察】『日本紀略』天延三年三月十七日条に「鴿満カキ天飛。其鳴聲似三童子泣」という記述があり、鳩の声から子供の産声を連想しての付けか。(伊藤)

産声を待つ間遅しとかかへ膝

二折裏十二(四十八) 清げに色をかける 楪(ウヅリ) 池

【式目】春

【作者】卓池

【語釈】●清げに すっきりとして。さっぱりとしてきれいに。「清げに注連をはゆる社家町」(口切に(歌仙)・

二四)。**●**いろをかける 色を託す。「山人の爪木にそふるゆづりには春をかけたる色はみえけり」(衣笠内大臣家良公集・新撰六帖・しはす・444)。**●**楪(ウヅリ) トウダイグサ科の常緑の高木。新しい葉が出た後に古い葉が落ちるところから、親

が子に代を譲る世代交代が円満におこなわれていると見立てる。ここは前句が誕生を待つ情景であり、そこからの縁で詠まれている。「楪の世阿弥まつりや青かづら」(続猿蓑・嵐雪)。「楪の土用芽春にまさりけり」(蓬宇が世継をまうけ

たるを祝て・177・青々処句集）。

【一句立】 すつきり美しく、新たな葉に色をつなぎ託していくゆずり葉の様。

【現代語訳】 子供が生まれる、その瞬間の産声がするのを、今や遅しと膝をかかえて待っていることよ。あのゆずり葉も、すつきりと美しく、新たな葉に色をつなぎ託していく。

（伊藤）

清げにいろをかける（ゆづりは）標

二折裏十三（四十九） 花さそふきざしか雲のたたずまひ 挙

【式目】 春（花）

【作者】 秋挙

【語釈】 ●花さそふ 花を誘う。ここは花がほころびそうになってくるような周囲の自然の働きかけの様子をこう表現した。「彼岸の雲の花さそふ山」（渭江話・一・梅舎）。●きざし 物事の起ころうとする前触れ。兆候。「昼貌の朝さく秋のきざし哉」（鳳朗発句上・夏の部・423）。●たたずまひ そのあるものの様子。ありさま。「おぼろ夜や朧に岩のたたずまひ」（春秋稿・828・界香）。

【一句立】 雲のありさまは、花が咲くという兆しだろうか。

【現代語訳】 （古い葉の上に新しい葉が出てゆずりは美しく色を重ねている。）雲を眺めればどこか春らしい様子が感じられる。（西行は如月の花の下で死にたいと詠んだが、）もうすぐ桜の花が咲くという前触れなのだろうか。

（名倉ミサ子）

花さそふきざしか雲のたたずまひ

二折裏十四(五〇) 雪も仏も別かれ済日に

池

【式目】春(仏の別れ)

【作者】卓池

【語釈】●仏 釈迦。「仏にはさくらの花をたてまつれわがのちの世を人とぶらはば」(千載集・雑歌・1067・西行)。

雪も仏もわかれ 次第に暖かくなって雪も降らなくなり、仏とも別れ。「雪仏きゆる林やさら双樹」(毛吹草第五・春・元次)。「きさらぎをまたでな消えそ雪仏」(犬子集・215・重頼)。釈迦が入滅したのは陰暦二月一五日で、ここから涅槃会のことを「如月の仏の縁」、「如月の別れ」ともいう。涅槃会には他にも「仏の別れ」、「雪の別れ」等の呼び名もある。本句は涅槃会を詠んだ句と考えられよう。「二月(きさらぎ)のわかれやおしむほとけ谷」(塵塚俳諧・上・18・斎藤徳元)。「見たように惜しむ仏の別かな」(藤の実・春・252・探芝)。「涅槃会や雪の別れも仏の名」(渭江話・六・2686・里楓)。陰暦二月十五日は陽暦なら三月下旬であり、保温用の紙子も用済みになる季節である。「涅槃忌の来れば紙子もわかれ哉」(李由・96)

【一句立】雪も仏も双方に別れてしまう日に。

【現代語訳】(雲のありさまは、西行がその下で死にたいと願った桜が咲く前触れだろうか。)暖かくなって雪も遠のき、お釈迦さまが亡くなった日を迎えたことだ。

【考察】前句と合わせ、花と涅槃会の両方に関わる西行の和歌を連想しているか。西行は陰暦二月十六日に没したが、一般にはその前日の涅槃会を西行忌とする。「願わくは花のもとにて春死なむその如月のもちづきのころ」は、西行の有名な辞世の歌であり、「如月のもちづき」は涅槃会の行われる二月十五日に当たる。如月の次は本句集の題名となっている弥生である。「如月の…」とされている涅槃会の異称を念頭に置いて詠まれたのであろう。卓池と秋挙による五十韻を締めくくるに相応しい句である。

(名倉)

弥生朔日、達堂・朱芳・流芝、破籠、竹筒など携へ来たりて仮寝す。西に茶の木つづきの坂あり。坂をくだれば、清水ながれて山葵の窪といふ処あり。

【語釈】●弥生朔日 文政七年(1824)の陰曆三月一日。●達堂 岡崎の卓池門人。●朱芳 岡崎の卓池門人。●流芝 鈴木氏。大和屋源右衛門。随念寺門前(現在の岡崎市門前町)に住した岡崎の俳人で、のち江戸に出て結社をもっている。卓池の後継者であり、天保八年(1837)、天保十一年(1840)の卓池の伊良湖吟行に同行し、天保十四年(1843)には卓池にかわり駿府の結社、清香社の指導に出かけている。同年、文政七年刊の『弥生日記』を増補再刊した。豊橋の俳人佐野蓬宇の句日記「このゆふべ」に、蓬宇と交友があることが記されている。●竹筒 竹を使った水筒。酒を入れたか。「米くいぬ人を迎へる籠敷て／竹筒の酒のへる閑もなし」(ことのはら・文化八年仲秋士郎・卓池・五雄三吟・第三／四・卓池／士朗)。

【現代語訳】旧曆三月一日に、達堂、朱芳、流芝が、わりごや竹筒などを持参してやってきて、泊まった。ここは西に茶の木が続いた坂がある。その坂を下って行くと、清水が流れていて、山葵の窪という名のところがある。

手おさへの鼠を逃す茶摘かな

達堂

【式目】春(茶摘)「新茶 古茶 聞茶 手始 茶摘む」(毛吹草・俳諧四季之詞・三月)

【作者】達堂

【語釈】●手おさへ 手で押さえつけること。「手をさへる草にひびくやきりぎりす」(梅室家集・虫・八〇二)。●茶摘 茶の木の若葉を製茶のためにつみとること。また、その人。「茶を摘に三月節を以て候とす、宇治の手始と云は、おほくは三月一日・二日・三日也」(滑稽雑談)。

【現代語訳】手でおさえつけた鼠を逃がしてしまった茶摘み人であることよ。

畔道や並ぶ燕に飛ぶつばめ

流芝

【式目】春（燕）

【作者】流芝

【語釈】●畔道 田と田をくぎる細い道。「畔道に乗物すゆるいなばかな」（阿羅野・卷四初秋・鷺汀・266）。●燕 春に渡来し、人家に営巢する鳥。「岩角に顔をならぶる燕哉」（りん女句集・390）。

【現代語訳】

春の畔道には並んでとまっている燕もいれば、飛んでいる燕もいることよ。

朱芳は小窓にもたれひとりごちして

鶯や日なれて声の引くはなし

朱芳

【式目】春（鶯）

【作者】朱芳

【語釈】●日なれて 日数がたつて。「山はみな蜜柑の色の黄になりて／日なれてかかる畑の露霜」（松風に）五十韻（元禄七年九月四日）・27／28・芭蕉／支考）。「うき寝鳥日馴て数にあらはるる」（曙庵句集・冬・263）。●声の引はなし 鶯の声が、長く引きのばした鳴き方になっていて。「黄鳥の引音しどろや泊り前」（はなのわたり・四季雑詠・京世南）。

【現代語訳】朱芳は、小窓にもたれて独り言のように（詠んだ）

鶯がさえずっていることよ。鳴き始めてから日数がたつて、上手に長く声をのばして鳴いていることだ。

（伊藤伸江）

流芝が懐にしてみても来たりし句は

【現代語訳】流芝が懐にいられて持って来た句は

柴舟のあとをよこぎるきぎすかな

水角

【式目】春（きぎす）「雉子同狩場の雉 声をむすびてハ春なり」（毛吹草二・連歌四季之詞・中春）

【作者】水角 「岡村是藏。岡崎藩中。天保十四年八月没。」（『新編岡崎市史 近世学芸13』第一章第九節「鶴田卓池とその門葉」）。

【語釈】●柴舟 江戸時代、松葉、青柴などを、瓦を焼く薪用に運送した小廻しの廻船。大坂には紀州、阿波、土佐、日向などからくるものが多かった。「柴（シハ）船、諸国にあり、小船・中船也」（和漢船用集四・船名数海船之部）。

●きぎす 「きじ（雉）」の古名。

【現代語訳】柴舟のあとを横切つて飛んでいく雉であることよ。（狩野二三）

夜は夜とて嘶に来たり山ざくら

和楽

【式目】春（山ざくら）

【作者】和楽 都築和楽。三河和泉（現安城市）の人。名は弥厚。俳諧を土朗、卓池に学び、秋挙とも交わつた。天保四年没、六十九歳。『西三河の俳人中島秋挙』に詳しい。

【語釈】●山ざくら 山にある桜。山に咲く桜の花。「みよし野のちか道寒し山桜」（蕪村句集上・春・173・糸桜賛）。なおこの句は蕪村自筆句帳・221、夜半叟句集・651にも見える（以上、『蕪村全集 三 句集・句稿・句会稿』による）。

【類句】「藤六か嘶ばしらや山ざくら」（国の花・1937・湖翁）。「上人のはなし尊し山ざくら」（蕉門名家句集・諷竹・118）。

【現代語訳】夜も夜とて、また相変わらさず嘶に来ては山桜の咲くように嘶に花を咲かせている。（狩野）

敷芝にめばちやかなるかはづ哉

東雅

【式目】春（かはづ）「蛙」（毛吹草二・連歌四季之詞・中春）

【作者】東雅 鶴見東雅。三河小垣江（現刈谷市）の人。名は源治郎。『諸国人名録』B本（卓池の使用した諸国俳人の人名簿。大磯義雄氏『青々卓池と三河俳壇』ほか、『愛知県史資料編20 近世6学芸』に所収。）には、「東雅 小垣江 鶴見源次郎」とある。俳諧を秋拳に学び、秋拳没後その句集『曙庵句集』を宜彦とともに編纂した。また、『万家人名録』五に「秋の夜や出ては見て来る軒の松」の句とともに収録されている（石川県立図書館蔵本による）。

【語釈】●めばちやか 原文「めはちやか」。『新編岡崎市史 近世学芸13』所収翻刻に従い、本訳注に於いても「めばちやか」とした。目もとなどのはっきりしているさまを表すか。●かはづ カエルの別名。

【現代語訳】敷かれた芝の上に、目のぼちりした様子の蛙がいることよ。

かへる雁風呂いるうちのゆだんより

棟老

【式目】春（かへる雁）「帰鴈名残 北へ行鴈」（毛吹草二・連歌四季之詞・中春）

【作者】棟老 中根棟老。三河平七村（現碧南市）の名主。名は親孝。通称は又左衛門、又右エ門、又衛門と諸説ある。『諸国人名録』B本には「棟老 東浦 中根又右エ門」とある（『青々卓池と三河俳壇』による。但し、『愛知県史資料編20 近世6学芸』では「棟老 東浦 中根又左衛門」とされる）。俳諧を土朗に学び、土朗追善集『はつかりづか』を編纂した。天保十二年四月没、五十七歳。なお棟老については、碧南市資料57『三河の俳人 中根棟堂』に詳しい。

【語釈】●かへる雁 きがん。春になって、南から北の寒い地方へ帰って行く雁。きがん友を偲ぶ一雁が飛んで行くのを見て、遠くに住む友をしのび、なつかしく思う。「帰鴈ともをしのぶ／らうやく口ににがし」（毛吹草二・世話付古語）

●雁―風呂 浜べに落ちてゐる木を拾い集め、雁の供養のために風呂をたいたと伝えられる雁風呂という風習がある。

『滑稽雑談』一六・八月之部下・二四に「雁風呂 落雁木 或説云 越国の海嶋にて、鴈の社渡る時、鴈の銜たる牧木を落す所侍る、海島の者は是を拾ひて、風呂をたくの薪とす、故に是を鴈風呂と云よしいへり」とあり、樗老はこのような俳書に於ける記述から雁―風呂というつながりの着想を得たか。

【類句】「さばき髪はい坂より花やりて／風呂屋の軒をかへるかりがね」（談林俳諧集一・大坂独吟集・478／479・西鶴）
 【現代語訳】風呂に入って油断しているうちに、雁は北へ帰ってしまった。

（狩野）

【引用文献】

和歌・俳諧の引用は新編国歌大観、新編私家集大成、古典俳文学大系のCD-ROMによる。語釈では『角川古語大事典』、『日本国語大辞典』『和歌大辞典』『季語辞典』『図説俳句大歳時記 春』（角川書店）等を参考に行っている。

『毛吹草』（1943・岩波書店）

『俳諧類船集』：『近世文藝叢刊1 俳諧類船集』（野間光辰監・1969）

『近世文藝叢刊別巻1 俳諧類船集索引付合語篇』（野間光辰監・1973）

『近世文藝叢刊別巻2 俳諧類船集索引事項篇』（野間光辰監・1976）

『嬉遊笑覽下』（1974・喜多村信節著・名著刊行会）

新編日本古典文学全集『枕草子』（1997・小学館）

歌論歌学集成第五卷『袖中抄（下）』（2000・三弥井書店）

『俳諧無言抄』（宮坂敏夫・東明雅「俳諧無言抄 翻刻と解説その一」（1983・信州大学医療技術短大部紀要）八号）

『和漢船用集』：『復刻日本科学古典全書』七（1978・朝日新聞社）

- 深津三郎編『板倉塞馬全集』(2003・犬塚謄写堂)
 新訂増補国史大系『日本紀略』全三卷(1979・吉川弘文館)
 四時堂其諺編録『滑稽雑談』(1917・国書刊行会)
 尾形仂・丸山一彦『蕪村全集 三 句集・句稿・句会稿』(1992・講談社)

【参考文献】

- 鈴木勝忠『川柳雑排江戸庶民の世界』鈴木勝忠(1997・三樹書房)
 鳥居清『芭蕉連句全註解』(1982・桜楓社)
 大磯義雄『青々卓池と三河俳壇』(1989・愛知大学総合郷土研究所)
 谷沢靖・永田友市『西三河の俳人中島秋挙』(1982・西村書房)
 『新編岡崎市史 近世学芸13』第一章第九節「鶴田卓池とその門葉」(1984・新編岡崎市史編集委員会)
 『愛知県史資料編20 近世6学芸』(1949・愛知県史編さん委員会)
 碧南市資料57『三河の俳人 中根株堂』(1990・碧南市史編纂会)
 鈴木煙浪『卓池雑考』(1976・三河発行所)
- ~~~~~
- 市橋文庫蔵『弥生日記』訳注(二) 補訂
 二折表二(二十四) 葡萄峠に縁切りの雨 挙
 二折表三(二十五) あとかくす声は乙のおくり人 池
- 「市橋文庫蔵『弥生日記』訳注(二)」において、現在の新潟県村上市にある「葡萄峠」、同じく新潟県胎内市にある「乙」について、『曾良旅日記』を引き、元禄二年六月から七月の芭蕉の奥の細道の旅を引用し、卓池の発想、手法につながっ

たのではないかと論じた。これに加え、卓池自らが二十四歳の時、寛政三年（1791）に、奥羽に旅をしており、その際には信濃から越後に入り、五月九日に乙の乙宝寺を訪ねている。それゆえ、当地を訪ねた経験をもとに、卓池は句を詠んだのであろうと推定できる。その際の紀行文の紹介・翻刻が鈴木煙浪『卓池雜考』（1976・三河発行所）にあり、該当箇所を引用しておく。

○九日 二り乙 乙ノ大日如意山乙宝寺ト云本堂十三間四面仁王門三重塔 六角堂

坊六本アリ此間桃崎ノ浜桃崎ノ渡有 三り半岩舟一り十九丁村上 山ノ頂二城有内

藤徳磨四万八千石此間石川ノ渡アリ 式里猿沢二り塩屋町 宿問屋与惣兵衛

○十日 式里武道箭葺明神と云有窟有 神木高ク岩ノ高サ三十五間巾七十六間あり

と云八幡太郎関東御下向之御箭カララもつて葺たまひしゆへ箭葺明神と申となり

また、「式里武道箭葺明神と云有窟有」という記述から、「武道」と「葡萄」のつながりが考えられよう。

この補訂は、加藤定彦立教大学名誉教授のご教示による。ご教示に感謝申し上げます。

稀書の会員

教員

久富木原玲（国語国文学科）・伊藤伸江（国語国文学科）・中根千絵（国語国文学科）・三宅宏幸（国語国文学科）・大塚英二（歴史文化学科）

院卒生・院生

狩野一三・熊澤美弓・名倉ミサ子・足立絵里奈・加藤彩・井上麻美・加藤華・美濃羽絃子・山本智穂・飯田有希乃

『弥生日記』実地踏査報告

伊藤伸江

【踏査日時】

平成二十七年九月十二日（日）

【踏査内容】

県大所蔵古俳書『弥生日記』に登場する俳人のゆかりの地をめぐり、その資料を拝見する。また、俳人たちの交際状況を、地理的な状況を体感しつつ把握する。

【踏査地】

① 豊田市郷土資料館（豊田市陣中町一ノ二二）

卓池の俳画（館蔵品・軸装四点）を出してもらい、文化財課職員伊藤圭一氏の説明を受け閲覧

（十時十分～十一時三十分）

←

② 足助八幡宮（豊田市足助町宮ノ後一二）

安藤芳行宮司にご挨拶、板倉塞馬に詳しい立花屋十一代林正博氏に紹介いただく

（十三時四十分）

以下、林氏の先導で車でめぐる

←

③ 足助資料館にて、八幡宮所蔵の俳額拝見

（十三時五十分～十四時三十分）

←

④ 足助町内の塞馬関係史跡探訪

塞馬建立芭蕉句碑・塞馬顕彰句碑・塞馬宅及び庵跡（三箇所）

←

⑤塞馬が晩年滞在した足助大庄屋小出家訪問

小出家奥様より説明をいただき、卓池俳画（軸装）、塞馬短冊、手紙、屏風など資料拝見（十五時～十六時十分）



⑥足助八幡宮

本殿、足助神社拝観、安藤宮司より解説

（十六時二十分～十六時五十分）

【参加者】

教員 伊藤仲江

院卒生・院生 狩野一三・熊澤美弓・名倉ミサ子・井上麻美・山本智穂・飯田有希乃

